



とりのこさんじょうじんじゃ ぎ おん
鷺子山上神社の祇園



▲前回(2002年)の祇園祭のようす

美和地域の鷺子山上神社では、今年が四年に一度の祇園祭の年にあたり、七月十六日に向けて準備が進められています。

◇鷺子祇園祭とは

鷺子山上神社は美和地域の鷺子地区と栃木県那珂川町大那地区をまたぐ地にあり、両県では、祭礼の日程も異なる珍しい神社です。このうち七月十六日の祇園祭は茨城県側でのみ行なわれている祭礼です。

祇園祭、と言えば壮麗な鉦や山で有名な京都の祭が思い浮かぶことでしょう。祇園祭の起こりは、当時の都、平安京で疫病が流行したのを御

霊(ふく)の不遇(ふく)の死を遂げた人の霊(たま)の祟(たた)りと考えて、その疫病神を鎮めるために行なわれた祭でした。

かつては十六、十七日の二日間行われていましたが、氏子の負担を軽くするために最近は一日に短縮して行われるようになっていきます。例年は居(い)祭(まつり)で、当日(とうじつ)氏子(うぢこ)が神社(じんじゃ)に向(む)いてお祭(まつり)を行(な)っています。

しかし、四年に一度は神輿(みこし)渡(わた)御(ご)があり、鷺子の六つの組(鳥居土・花輪・仲島・宿・袋木・下郷)からそれぞれ、山車(やまぐるま)や屋台(やたい)が出て、国道二九三号線を巡行(めぐり)するという華やかな祭礼(まつり)と化(な)します。六組(むくみ)は四年(よね)に一度(いちど)交代(こうたい)で当番(とうばん)を務(と)め、祭礼(まつり)の一切(いっけい)を取

り仕切ります。今年は下郷組が当番に当たっており、週に一度地区の公民館でお囃子(はやし)の練習(れんしゅう)が続けられています。

戦前は、ほぼ毎年このお祭が行なわれていたようですが、地域に残る祭の多くがそうであるように、鷺子祇園祭も高齢化や人手不足の波にさらされました。戦後は不定期に開かれることが多くなったといえます。それを憂えた氏子や神社関係者が三十年ほど前から、四年に一度にして神輿(みこし)渡(わた)御(ご)を含む祭礼(まつり)を執(と)り行(な)つてきました。

◇祇園祭に出かけよう

祇園祭は前日から始まります。十五日の夜は宵祭(よまつり)が行なわれ、各組の祭場(まつりば)で山車(やまぐるま)や屋台(やたい)に明かりが灯され披露(れいぎよ)されます。普段は各地区の蔵に大切に保管(くわんぱん)されている山車(やまぐるま)・屋台(やたい)をこの祭礼(まつり)の間(ま)だけ見ることができま

す。祭(まつり)の当日(とうじつ)は朝(あ)から神輿(みこし)が神社(じんじゃ)を出(で)社(しゃ)します。六組(むくみ)の山車(やまぐるま)・屋台(やたい)が神社(じんじゃ)の下の鳥居土(とりいど)地区(ちく)まで神輿(みこし)を迎(むか)えに來(き)たあと、神輿(みこし)につき従(したが)い国道(こくどう)を巡(めぐ)行(こう)し、夕方(ゆふがた)にはお旅所(おりょじよ)に到(いた)着(ちゃく)します。神輿(みこし)・山車(やまぐるま)・屋台(やたい)が勢揃(せいぞろ)いしたところでお囃子(はやし)が始(はじ)まり、夜(よ)が更(さら)けるにつれて賑(にぎ)やかさを増(ま)していきます。



▲鷺子下郷公民館でのお囃子の練習

かつては神輿(みこし)の舁(か)き手(て)も当番組(とうばんぐみ)が担(か)っていました。祭(まつり)に参加(さんか)する人が減(へ)ってしまつたため、現在(げんざい)では六組(むくみ)の氏子(うぢこ)が交代(こうたい)で担(か)ぎながら渡御(わたご)するようになっています。また、昔(むかし)は当番組(とうばんぐみ)だけが屋台(やたい)を出(で)し、他の組(ぐみ)は山車(やまぐるま)を出(で)す慣(な)わしだったようです。当番組(とうばんぐみ)の屋台(やたい)での余興(よきょう)や芝居(しばい)を中心(ちゅうしん)にして他の組(ぐみ)の山車(やまぐるま)でお囃子(はやし)などが行(な)われていたようです。

地域の抱(かか)える様々な問題(もんだい)によつて祭(まつり)の形態(けいぎ)は変(か)わつていきますが、氏子(うぢこ)や神社(じんじゃ)の方々(かたがた)、地域(ちいき)の皆さん(みなさん)の協(きょう)力(りき)によつて続(つ)いていふるさとの祭(まつり)を大(だい)切(き)にしたいものです。ま

ずは見物(けんぶつ)に出(で)かけてみましよう。
(歴史民俗資料館)